

# 人間の行間

本郷 好樹

一

私は文章と文章の間に、もう一つの文章が綴られていると思う。物事には裏と表が有る様に文章にも裏表が有って、人間の生き方にも行間が有るのではないかと従来より考えていた。

本音と建前を上手く活かして、無駄な争いを避ける術は必要でも有る。

私が未だ子供の頃大人達は良くこう言った、「坊やは良い子だね」と。今思えば「謀や、良い子になってね」と言っていたのだらう。

「そんな筈は無い」とは、否定の様だが実は肯定を望んで相手に強要しているのかも知れないし、「それは駄目だと思うよ」は「そうなって欲しくない」の同義語だらう。

機械の全てと言って良いと思うが、「遊び」の大切さをご承知であらう。自動車のハンドルには絶対必要なことである。余裕とは少し違った「遊び」とは不思議な行間である。

所謂、相手がどの様に受け取り、考えて行くかだと思ふ。文章の行間を意識して書く人はいないだらうが、書き手も読み手も常に行間の存在が後から湧いて来ると言うか、意識として残るのだ。

又、人と人が上手に付き合っていくには、適度な間隔が有って然も着かず離れずで保たれている事も多い。良いのか悪いのかで無く、曖昧でも無い「遊び」の世界は長い人間の歴史が導いてくれた財産かも知れない。

好きか嫌いか、はつきりしなくてはならない時、どっち着かずで逃げるのは卑怯である。

中々行間を読んでくれる人はいなくて、書き手として物足りなさを感じる事は多いが、PTA会合の終わった後の下駄箱会議では無いが、ペチャクチャあだこうだのおしゃべりと同じでくだらないと私は思っている。

ドキュメンタリーでも小説、エッセー、と書き物は沢山有るが全てに行間が有って、読み手としては嬉しい限りである。

数学の様に答えは一つ、一足す一は二とはつきりしている物と、一でも二でも無い人間同士の行間は生きて行く上は欠かせぬ事は大切な事なんだとこの歳にな

つてはじめて気が付いたのである。

語りには「間」と言う、もう一つの大事な話し方が有って、これも行間に似て不思議な人間の知恵だろう。聞き手にとってもこの「間」は心地が良く何とも言えない行間を感じる。

何れにしる曖昧、遊び、間、は物言わぬ潤滑油の様に大切さを感じている。

思いつきでの話で恐縮だが、生きている内に気が付いて良かったと心から感謝しているこのごろである。

## 二

人間は神が作ったと思っている。万物の霊長と言うがそれは別として、脳の働きは地球上で一番であろう。それだけに落とし穴に気を付けねば大変な事になる。例えば「こ狛い」人間は多い。頭が良いために起る狛さは、他を退ける能力の持ち主である。

官僚と言われる一部の人間が、法の目を潜って所謂公僕の間を逸脱している。

上流思考に憧れ、他を凌ぐ勢いで悪に向かう人は多い。そこには人の足を引っ張り、公平を嫌う傾向があるのだ。

人間の行間は前にも述べたとおり、ハンドルの遊びと同じで、必要なものである。

行間と似て非なる物に表裏の問題があつて、本音と建前も事に依つては大切であろう。

それを相手も理解している含蓄さ、器とでも言おうか微妙な心の動きがある。この微妙な動きが生きてゆく大切な行間となつている。

それは文章や詩歌に上手く働いているのがいい。

行間と言えば横の意味がある、一方縦の意味を持つ行間は人間の上下関係にある。目上目下の関係が社会の均衡を保ち、公平さも維持していると思う。これは緊張さとなつて働いていることだ。

別に融通をする意味も色々あつて何か目に見えないバリアがある。

間があつたり、行間があつたりして人間は成り立っているのか！

もう一つの何かを支えられているとも言える。

人間生きて行くという事は大変だ。大変なだけに意味もあつて面白いのだ。